

ディレクターメッセージ

未来を準備する

日頃からのご支援に心から感謝しております。2019年度事業の活動成果をお手元にお届けします。皆さまの実践活動の場でご活用いただき、さらにはご意見などお寄せいただければ幸いです。

社会状況への「対応」と予見への「準備」を行い、必要とされる事業を適切なタイミングでスタートさせる。それが私達が目指してきた「10年の単位で取り組む文化事業」のあり方です。「東京アートポイント計画」「Tokyo Art Research Lab」「Art Support Tohoku-Tokyo」の3事業も2020年度をひとつの山場とし、次の10年を見据えた展開につなげるため、今年度活動してきました。

しかし、社会状況への「対応」と「準備」を手がけてきた私は今、新型コロナウイルスがもたらす社会の変化にすこし身構えています。2020年3月現在は文化施設の休館、学校の休校、入国管理の強化と、感染症蔓延防止策が次々と実施され普段とは違う日常の真っ只中です。またあの日常が戻ってくると楽観視したいところですが、今までと同様という訳にはいかないかもしれません。

例えば、今回の「一斉の措置」により明確になったのは、人々の働き方や暮らし方、家族構成や身体性、言語等の多様性を前提とした対応が不可欠であることです。文化事業の取り組みも、これまで以上に多様性を前提とし、活動していく必要を改めて痛感しました。SDGsが標榜する「誰一人取り残さない」は、社会課題への文化芸術からのアプローチも求めています。

また、2019年は、アートを主語にした「表現の自由」についての考察が活発になされた年でもありました。しかし2020年の私達が担うべきは、アートやアートプロジェクトが人にもたらす意義、社会課題に対する文化事業の役割について再考することではないでしょうか。

アートプロジェクトのために定期的に集い、会議をし、食事をし、準備をし、実施し、人を招き、おもてなしをする。そういった「人の輪に入り交わって過ごす」ことの社会的意義は、イギリスを中心に医療の現場で議論されている「社会的処方」や、山梨県の「無尽(むじん)」という習慣にも共通するものだと考えています。このような社会状況だからこそ、アートプロジェクトの可能性がまだまだあると信じています。

昨年、このレターの結びに「文化を育もうとする、覚悟と技術を持ち続ける」と記しました。2020年度はこのことをさらに力強く実践し活動を展開して参ります。

どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

アーツカウンシル東京 東京アートポイント計画 ディレクター



あ び

OVERVIEW | 2019年度の取り組み

東京アートポイント計画

対話の場を、立ち上げる

2019年度は新たに2事業を立ち上げ、9事業を共催しました。昭和の世田谷をうつつした8ミリフィルムのデジタルデータを活用し、映像を介した語りの場を生み出す「移動する中心 | GAYA」、在留外国人と日本人の日常的な出会いの場を立ち上げることを試みる「[東京で(国)境をこえる]」がスタート。「TERATOTERA」「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」では、2020年度に10

東京の地域社会を担うNPOとアートプロジェクトを実施し、NPOの活動と組織の両面を支援する取り組み。

年の集大成として展開する企画に向けた準備を進めました。今回お届けした「ファンタジア!ファンタジア!」の『ファンファンバック2019』は、これまでの地域との対話の成果をポストカードや地図など様々なかたちで制作。試行錯誤の実践と現場から生まれた気づきを、ぜひご覧ください。https://tokyoartpoint.jp

tarl TOKYO ART RESEARCH LAB

多様な視点と視座から「つくる」

スクールプログラム「思考と技術と対話の学校」では、アートプロジェクトの核をつくる実践「東京プロジェクトスタディ」において、ことば、パフォーマンス、映像エスノグラフィーを軸に3つのスタディを展開。さらには、10年目となる東京アートポイント計画の知見から次の実践につなげることを試みた「レクチャー」、新たな

アートプロジェクトを実践する全ての人々に開かれ、共に作りあげる学びのプログラム。

プロジェクトを立ち上げるためのヒントを探る4つの対話シリーズ「ディスカッション」を実施しました。スキルの検証や確立を目指す「研究・開発」では、新たに「手話と出会う研究会」に着手。2020年度にはアートプロジェクトの現場で使える手話講座の開講を検討しています。https://tarl.jp

ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO

震災の経験を、日常で語りなおす

東日本大震災から9年目の東北3県で7事業を実施しました。岩手県釜石市のかまいしこども園で続けてきた「ぐるぐるミックス in 釜石」は園の先生方が主体的に展開する「プチぐる」を始動。福島県いわき市の復興公営住宅を軸とした「ラジオ下神白」ではTokyo Art Research Labと連動し、都内近郊の公募メンバーで「伴奏型支援バンド」を結成。成果の振り返りと、新たな活動の始

東京都による芸術文化を活用した東日本大震災の被災地支援事業。

まりが並走しています。ジャーナル『FIELD RECORDING』は第3号と第4号を同時発刊。特集では東日本大震災と他の厄災の経験を重ねました。震災後に始まった活動を、どう日常のなかに位置づけるのか。10年という節目を前に、新たな課題に取り組んでいます。http://asttr.jp/

Words Binder 2020 / Bag+Letter

発行日 | 2020(令和2)年3月26日 アートディレクション&デザイン | 川村格夫
発行 | 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京 〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28 九段ファーストプレイス8階
Tel: 03-6256-8435 Fax: 03-6256-8829 E-mail: info-ap@artscouncil-tokyo.jp URL: https://www.artscouncil-tokyo.jp
© 2020 Arts Council Tokyo

Words Guide 2019▶▶2020

今回お届けした冊子やアーツカウンシル東京のブログ記事のなかから、新たに生まれた「ことば」をご紹介します。

ひたすら孤独になって断絶が起きていくことに、どうにかして抗えないかと考えたときに、コレクティブがすごく輝いて見えたんです。

(『TERATOTERA DOCUMENT 2019』p.38)

災害などの厄災が引き起こした出来事は、遠く離れた場所で共有可能だろうか？

(スタジオに入っただけでいい—Artpoint Letterより<アーツカウンシル東京ウェブサイト>)

自分で釣ったハゼが仙台雑煮のダシという食文化につながるのが面白い

(『つながる湾の軌跡 2013-2020 アーカイブプロジェクト』メンバーの視点編)

他者が置かれている状況なんてわかり合えないという前提に立ちながらも、力を尽くして相手を想像し続けることは、とても困難だ。テレビやインターネットをみれば、「ああ、あの人たちはいまこんな感じで生活しているのか」とわかることもあるかもしれない。しかし、「わかったこととすること」と「わかれようとし続けること」の間には、雲泥の差がある。「表現」が持ち上げてくれる「想像力」を養うことは、すなわち「わかれようとし続けること」を諦めないことではないだろうか。(『ラジオ下神白〜あつきのあつきの音楽からいまこへ 2017-2019』p.101)

東京を歩き、話を聞かせてもらいながら、自分の考えをことばにしていくことで、足元にある東京が多層的な場に変容していく。そこから、ともに生きる他者が持つ物語や日々の暮らしの機微への想像力を持つことができる。「つくる」という技術は誰もが少なからず持っているものですが、こういった準備運動をしてから「つくる」ことで、より飛躍が可能になる気がします。

(『東京プロジェクトスタディ バンフレット』 瀬尾夏美インタビュー)

自分たちは、ウェルビーイングに働きかける取り組みをする際、演劇や落語やアートなど、地域文化を活用したアプローチをしたいと考えていて、それを社会的処方と比較して「文化的処方」と呼んでいます。

(『AM/PM - Artpoint Meeting Paper Media -』第2号)

「つくる」力が必要だ。

(『東京プロジェクトスタディ バンフレット』)

おはよう、こんにちは、さようなら。そんな挨拶が交わされる日常の延長線上で、いつもと違った視点で島を見つめ、自分なりの島との関わりかたを見つけるためにどんな仕掛けや工夫ができるのか。

(新しい風を吹き込む拠点づくり—Artpoint Letterより<アーツカウンシル東京ウェブサイト>)

僕自身は言葉をつくる行為と、体験をする行為は、決して逆のことではありません。

(レクチャー「文化に時間をかける「ことば」をひらく—東京アートポイント計画の10年から紐解いてみる—」第3回アーティストは何をつくっているのか? <Tokyo Art Research Labウェブサイト>)

打って出る

(ジムジム会 #03レポート「打って出る/NPOの届けかた・つなぎかた」<アーツカウンシル東京ウェブサイト>)

『誰のものか?』というものへの模範解答としては『みんなのもの』という意見が出がちですが、その問答は何も答えていないに等しい。

(ディスカッション1「どこまでが「公」? どこまでが「私」? —まちを使い、楽しむ暮らしをつくる」レポート<Tokyo Art Research Labウェブサイト>)

文化政策は自治の基盤となる。

(レクチャー「文化に時間をかける「ことば」をひらく—東京アートポイント計画の10年から紐解いてみる—」第2回 文化政策の流れを比べてみる〜「10年単位」で起こること<Tokyo Art Research Labウェブサイト>)

彼らにとって雨が「恵み」であったとするなら、これは歓迎のサインかもしれないとも思った。

(『松島湾の遺跡図鑑』p.61)

かたちのない「プロジェクト」を、価値化するための「返し縫い=記録」

(『10年を伝えるための101日「東京アートポイント計画 ことばと本の展覧会」ドキュメントレポート』を発行しました。<アーツカウンシル東京ウェブサイト>)

ことばが「声」に出され、その「声」が手渡されながらつくることで、ことばは解像度を上げ、輪郭を成し、共鳴し合い、ひろがりとなって、場にひらかれる。手渡されることで、ことばはそれを書いたひとだけのものではなくなり、関係性のなかで生き始める。ことばはひとりでは成り立たないのだと、メンバーが朗読する声に耳を傾けながら、強く思う。

(『続・東京でつくるとのこと「わたしとアートプロジェクトとの距離を記述する」』p.15)

ありあわせのもので生まれる工夫は墨東エリアの魅力を理解する一歩かもしれない。ここは生き方がかたちになったまちだから。

(『ファンファンバック2019』これするとファンファン! 「ありあわせのもので」)